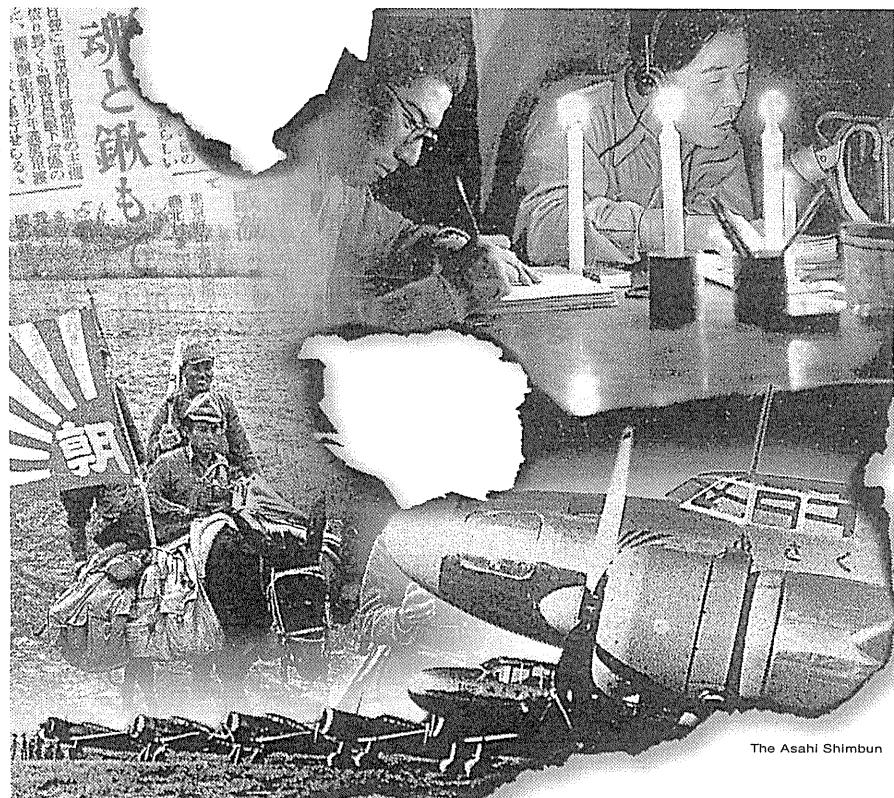


メディアが戦争を阻止することは可能なのだろうか。年間連載「新聞と戦争」を終えるにあたり、3人の識者に聞いた。

新聞と戦争

メディアの果たす役割は



「新聞と戦争」 07年4月から1年間、朝日新聞に掲載された連載記事。日本が満州事変から日中戦争、太平洋戦争へ向かう過程で、主に朝日新聞がどう行動したのかを、当時の人々の日記や元記者たちの話、社内資料などによって検証した。

満州事変を機に、それまでの自由主義的な論調から軍の行動を肯定していく裏側を探った「社論の転換」、記者の行動と内面に迫った「戦場の記者たち」「南京」「女を集める」など23シリーズ、240回以上に及んだ。連載は6月に朝日新聞出版から単行本として刊行される予定。

戦争についての私の記憶は1940年に始まる。当時の私は、国民学校への入学を翌年に控えた子供だった。我が家は朝日新聞をどうしていた。私は新聞が好きで、何に書いてあることは本当にことだと思っていた。

新聞はあの戦争を正義の辯論した。国家にとって不都合な情報は、情報局の軍の報道部に抑えられて報道しなかった。それらの点で新聞には、いわゆる戦争責任があると言える。

だが、あのときの新聞についての戦争は間違っている」という批判が出来ただろうか。当時の私自身の感覚に照

いのうえ
井上 ひさしさん

作家·劇作家

A black and white portrait of a middle-aged man with short, light-colored hair. He is wearing large-framed glasses and a dark, ribbed, zip-up sweater over a light-colored collared shirt. The background is dark and indistinct.

34年生まれ。「父と暮せば」「東京セブンローズ」など、戦争をテーマにした作品を数多く発表。

深みのある歴史分析こそ

独壇場であるはずだ。つづるつるした「時代のキー ワード」が作られて皆が一方 向へ動こうとするとき、過去と未来を考えて深みのある分析の言葉を作ること。新聞にはそれを期待したい。今を伝える記事と同時に、10年後の未来を中期的な視点で考える記事や、50～100年の長期的視点で歴史の大状況を考える記事を載せることだ。

満州事変で朝日はなぜ、軍の中国侵攻を追認してしまったか。取材班は総括で、「ペニンを取るか生活を取るか、ジャーナリズムとしての覚悟の問題に帰する」と書いた。

だが私は、個々の記者は「生活」を取りうるを得ないと思う。「記者はペンを取る、会社は記者の生活を守る」。そんな原則を理解した経営陣がいることが、よい新聞社の条件ではないか。新聞と戦争について戦後いろいろな記事が書かれたが、今回の連載「新聞と戦争」は出色のできばえた。過去の自らの活動を、驚くほど厳しく自己点検している。過去と同じわだちにはまりこまないたために必要な作業だと想つ。引き続き勇気をもつて、自己点検を続けてほしい。

(聞き手・塩倉裕)